

支援団体より報告

### 3.11伝承ロード New Destinationプラン ～地域観光資源と震災伝承施設を融合させた新たな周遊モデル開発事業～

一般財団法人 3.11伝承ロード推進機構

事業タイトルを見て何のことかわからない人は、東日本大震災の伝承活動を知らない人かも知れません。既に、被災地では「3.11伝承ロード」と聞けば、震災伝承施設のネットワークを活用した東日本大震災の伝承活動と理解できます。その後にデスティネーションと続けば、被災地の活性化に向けた観光を推進する事業だと、すぐに理解できるはずですが、前置きが長くなりましたが、宮城県仙台市から青森県八戸市に至る三陸沿岸道路が、復興道路として全線つながったのが令和3年12月。その全線供用を受けて実施した事業が、この「3.11伝承ロード New Destinationプラン」です。

この事業のポイントは大きく3つあります。

まず1つ目は、三陸地域が抱える観光課題への対応です。三陸沿岸地域はもともと漁業と鉱業が盛んな地域であり、観光資源といえバリアス海岸などの地形や自然景観といった、いわゆる「ジオ資源」がほとんどで、テーマパークなどのアミューズメント系の観光資源はなく、観光産業の育成が地域の大きな課題となっていました。

2つ目は、震災を契機に広がった伝承活動と施設整備の取り組みです。平成23年の東日本大震災により地域は甚大な被害を受けましたが、住民や関係者が全力を挙げて復旧・復興に取り組み、同時に、これまで度々繰り返されてきた津波被害も含め、二度と大きな犠牲を出さないようにと、被災地では震災直後から伝承活動が盛んに行われてきました。平成25年には、復興予算の中で震災伝承施設の整備が認められ、被災自治体による震災伝承施設の整備が進み、地域は震災学習の拠点になりつつあります。

そして3つ目は、これらの資源を活かした新たな復興ツーリズムの提案です。三陸沿岸道路の全線供用に合わせて、これら施設の利用拡大を図る観点から、既存の観光コンテンツと震災伝承施設を融合させた、これまでにない新たな復興ツーリズムを提案できると考えました。

つまり、震災伝承施設の活用によって災害の記憶と教訓の伝承が促進され、災害大国としての防災力の向上に貢献するだけでなく、三陸沿岸地域が防災学習のメッカとなる新たな復興ツーリズムを提案することが、国土計画協会の支援によるこの事業の目的です。

事業を進めるにあたっては、東北大学災害科学国際研究所の奥村誠教授に座長をお願いし、青森、岩手、宮城3県から、観光事業者、行政関係者、マスコミ関係者など15名による「三陸沿岸道路エリア活性化検

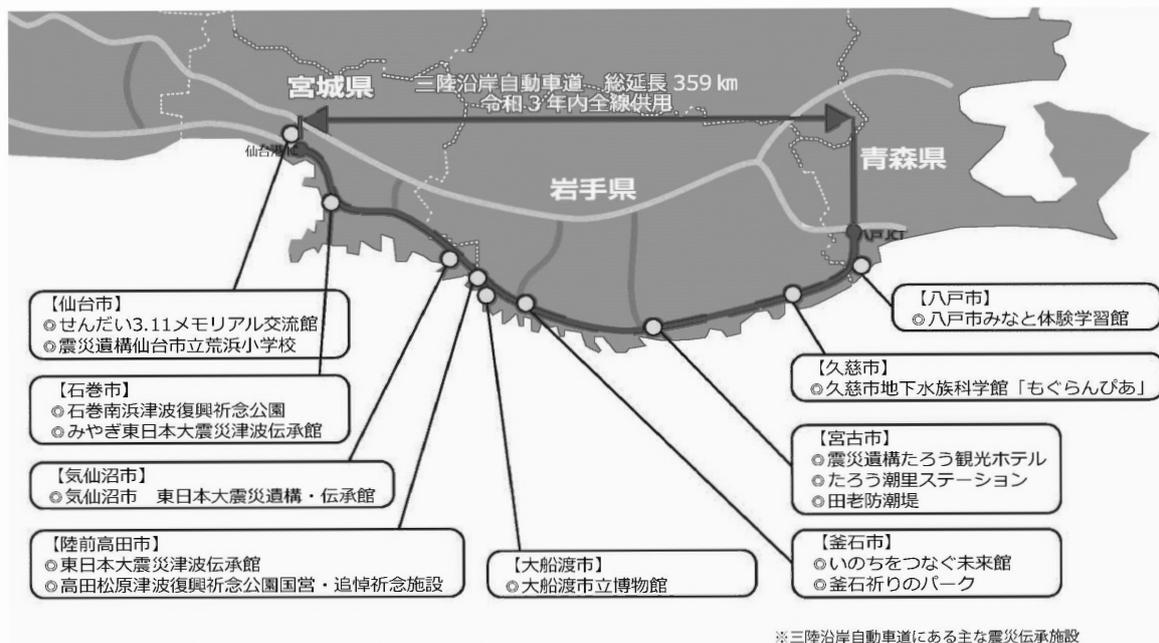


図1 事業対象の位置図

討会（以下、検討会という）」を立ち上げ、さまざまな助言をいただくことにしました。

第1回目の検討会を仙台で開催しましたが、取材したマスコミは7社にのぼり、この事業の関心の高さがうかがえました。

この事業のアウトプットは、被災後に新たに整備された三陸沿岸道路を基盤として活用しながら、新たにできた震災伝承施設と、既存の観光コンテンツを融合させた、新たな観光のモデルルートを提案することです。そのため、①新たな周遊ルート可能性調査、②モデルルートにおけるモニターツアー、③三陸地域の魅力を伝える情報発信を行うことにしました。

1年目においては、周遊ルート可能性調査として、被災後の地域変化を把握するために、三陸沿岸道路や地域の観光の特性、また沿線自治体の考え方や観光政策について、自治体へのヒアリングを行いました。

三陸沿岸道路には、8つの特性があります。①東北道の代替路であること。②自専道でほとんどが2車線であること。③休憩施設が少ないこと。④津波被災エリアを通過しないことから、強靱性があるルートになっていること。⑤雪の多い東北の中でも比較的雪が少なく冬期の安全走行が可能であること。⑥リアス式海岸の風光明媚な沿線を通過すること。⑦沿線には震災伝承施設が多く、震災伝承のメッカとなりうる場所であること。⑧三陸沖は世界三大漁場の一つであり、豊かな海産物がとれること。こうした特性を活かしながら、現況整理を行いました。



写真1 検討会状況

交通量については、1.2~1.0倍程度と高い伸びとはなっていませんが、全線完成後の時間短縮効果は大きく、被災前と比べて3時間半も短縮しています。

それに伴い、新たな高速バスのルートが3路線追加になり、既存の1路線についても東北道経由から三陸沿岸道経由に変更になり、時間短縮効果が発揮されています。もちろん、企業進出も多く大きな事業効果になっています。また、SA・PA等の休憩施設を補うように、ICから比較的近い場所に道の駅の整備が行われ、6つ駅（釜石仙人峠、三滝堂、青の国ふだい、さんさん南三陸、いわて北三陸、東松島）が増設しています。

沿線には、震災伝承ネットワーク協議会（青森、岩手、宮城、福島4県と仙台市、東北地方整備局、復興庁で構成）が登録している震災伝承施設のうち、最もクオリティーが高い第3分類施設が32施設もあります。これらの施設を活用しつつ、全長359kmという長大な三陸沿岸道路を10のエリアに区分し、地域の持つ観光コンテンツと震災伝承施設との相性やアクセス性を考慮し、観光特性や沿線自治体へのヒアリング結果を踏まえて、モデルルートの事前整理を行いました。

2年目に入ると、沿線にある32施設について、モデルルートで活用する施設を絞り込む際の参考とするため、首都圏における認知度を把握する震災伝承施設のWebアンケート調査を実施しました。

これらの調査結果を踏まえ、モデルルートとモニターツアーの考え方について、検討会で議論を行っていただきました。その際の論点は二つあり、①ルート設定をどのように行うのか、②誰をモニターにするのか。という点でした。特にルート設定については、各委員の思いが交錯し、結論は次回の検討会に持ち越されることになりました。モニターについて、当初は一般の方と、専門家として、企業の防災担当やBCP関係者、防災教育関係者を想定していましたが、一般の方々の意見も大切である一方で、実際に旅行者に観光ルートを提示し、旅行を段取るのは旅行事業者であることから、「旅行事業者から見たモデルルートやコンテンツに対する評価が最も大切ではないか」との意見が多数を占めました。そのため、モニターツアーは旅行事業者をモニターにして行うことになりました。

また、専門家によるモニターツアーについては、もともと震災伝承施設の整備に際して専門家の意見が反映されている点も踏まえ、新たな切り口として、「インバウンドの視点からコンテンツを評価してもらうことが、より参考になるのではないか」との意見が多く出されました。結果として、当機構が台湾プロモーションを行っていることもあり、台湾の教育関係者によるツアーを実施することにしました。

ルート設定については、第3回目の検討会で改めて議論していただきました。その際に示したルート設定の考え方(表1参照)に基づき、テーマ型と探求型を組み合わせたルートが望ましいとの意見で一致し、具体的なルートの検討を進めることになりました。

ルート設定にあたっては、三陸沿岸地域が縦に長いことから、宮城県内を1区間、岩手県を宮古市で南と北に区分して、陸前高田市～宮古市を2つ目の区間として、岩手県宮古市から青森県八戸市までを3つ目の区間とし、3コースでモニターツアーを実施することとしました。なお、モニターには日本旅行業協会(JATA)東北支部からの全面的な協力が得られることになりました(写真2、3、4参照)。

表1 ルート設定の考え方 比較表

| タイプ  | ルートの考え方       | 手法                               | 期待される効果   |
|------|---------------|----------------------------------|-----------|
| テーマ型 | テーマに沿った流れ     | テーマを設定し、そのテーマに沿ったコンテンツ巡る         | 地域の理解度向上  |
| 探求型  | 探求課題を深掘りする    | 探求する課題に応じて、徐々にその課題を深掘りするコンテンツを示す | 満足の向上     |
| 連鎖型  | 関連するコンテンツの広がり | 関連する広がりのあるコンテンツを示しながら巡る          | 地域の魅力の再発見 |

表2 各ルートのテーマと行程

| ルート    | A ルート   | B ルート  | C ルート  |
|--------|---|--|--|
| 区間     | 仙台市～気仙沼市  | 陸前高田市～宮古市  | 宮古市～八戸市  |
| テーマ    | 産業復興と賑わいの創出   | リアス式海岸と震災の教訓を知る  | 自然が織りなす景観と津波防災を学ぶ  |
| 行程     | 仙台駅発＝野蒜ヶ丘団地＝石巻南浜津波復興祈念公園＝シーパルピア女川＝(宿泊：南三陸町)＝道の駅「さんさん南三陸」＝気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館＝気仙沼市内湾地区＝すがとよ酒店＝道の駅「かわさき」＝一ノ関駅着<br>1泊2日 | 一ノ関駅＝東日本大震災津波伝承館＝三陸鉄道(盛駅～釜石駅)＝いのちをつなぐ未来館＝(宿泊：釜石市)＝鶴住居川水門見学＝大槌町文化交流センター「おしゃっち」＝浄土ヶ浜＝道の駅「やまびこ館」＝盛岡駅着<br>1泊2日 | 八戸駅発＝八戸市みなと体験学習館＝道の駅「いわて北三陸」＝小袖海岸＝普代水門＝(宿泊：野田村)＝北山崎断崖クルーズ＝たろう「学ぶ防災」＝浄土ヶ浜＝道の駅「やまびこ館」＝盛岡駅着<br>1泊2日 |
| コンテンツ数 | 8箇所   | 7箇所  | 6箇所  |
| モニター   | 5人  | 5人   | 5人   |

モニターツアーの結果については、コンテンツを震災伝承施設、インフラ施設、観光施設等に区分して、それぞれ評価できる点と課題に分けて意見をいただきました。意見は大変参考になり、該当する震災伝承施設にフィードバックも行いました。なかでも、モニターの方々から好意的な自由意見が多く寄せられたので一部を抜粋して紹介します。

1. 商品への展開

- ・今回学ばせて頂いた内容を基にどのような誘客が出来るかを検討したい。
- ・インバウンド向けにコンテンツのブラッシュアップ、ルート設定等検討させていただきます。
- ・伝承施設について、「ダークツーリズム」として普及させ、世界各国及び国内の方との交流のきっかけになる事ができればと思いました。

2. 教訓の伝承

- ・東日本大震災の悲惨さや教訓は大事なのだが、震災を知らない子供達には悲惨な出来事だけを伝えるのではなく、「生き残る為の教訓や知識」を伝える施設が増えると良いと思う。
- ・生き残る術を学べる事により、未来永劫大震災の事実を後世に残していけるのだと思う。
- ・これから先の未来に残すべきは、悲惨さのマイナス面より、プラスの発想が必要なのだと感じます。

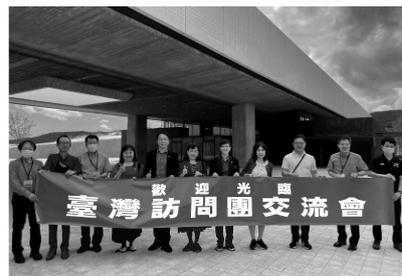


写真2、3、4 モニターツアー実施状況

台湾教育関係者の招請ツアーも無事に終了し、参加者からは「防災教育や生命教育を教える学習場として活用できる。」「最新技術を活用し、当時の様子を伝えていくことは、将来の子供達にとって最良の歴史教育である。」「学生の防災意識を高め、命の尊さを分かりやすくすることができる。」などと震災伝承施設の教育的価値を理解していただくことができました。

3年目では、これまでの議論を踏まえ、震災伝承施設の観光コンテンツ化に向けた情報発信を効果的に行いました。その目的は、東日本大震災で甚大な被害を受けた被災地において、復旧・復興が進み、三陸沿岸道路の整備により、沿線エリアは劇的な変化を遂げていることなどを、わかりやすく伝えることです。また、被災地の経済、社会、産業がどのように変化したのかを明らかにし、域内外への人に地域の魅力をわかりやすく発信することで、地域の活性化を支援することです。

三陸地域内の方々に向けては、広いエリアを考慮して、気仙沼市と釜石市の2か所で地域活性化フォーラムを開催しました。また、三陸の域外の方々に向けては、新しい三陸の魅力を伝える映像制作を行いました。

地域活性化フォーラムについては、基調講演とパネルディスカッションの構成で実施しました。基調講演には検討会の座長を務めていただいた奥村教授にご登壇いただき、パネルディスカッションは、女性を中心とした構成で行いました(写真5参照)。

この2か所のフォーラムは、マスコミの取材も入り、大変好評を博しました。

また、域外向けの映像制作(写真6参照)にあたっては、東日本大震災から13年が経ち、三陸沿岸道路が全線開通した今、新たな復興のステップを迎えていることを目的としました。新設した震災伝承施設や復興インフラは、被災者の様々な思いが込められた施設であり、貴重な地域の資源であり、かけがえのない財産でもあります。あわせてこれらの震災伝承施設のネットワーク化は、「3.11伝承ロード」として、震災伝承や防災の役割にとどまらず、人と人、地域と地域をつなぎ、地域の結束力を高める大きなコンテンツであることを、わかりやすく伝えることにも力をいれました。

この動画が広く発信されることにより、三陸地域への誘客が進み、三陸沿岸道路の利用促進や震災伝承施設への集客にもつながることを期待しています。

この事業で、当初目指していた三陸地域の観光の基盤となる観光ルートの設定は、モデルルートの提案にとどまりましたが、旅行者によるモニターツアーに大いに期待しており、今後は旅行者による新たな観光ルートを提案していただけると信じています。

むしろ、我々としてはこの事業を通じて、震災伝承の観光的価値の醸成につながり、震災伝承施設の観光コンテンツ化に向けて大きな道を切り開いたと実感しています。

また、今後ますます災害の激甚化や頻発化が進むなかで、震災伝承施設の価値はさらに高まっていくと考えており、大きな可能性を秘めた資源として発展していくことを願っています。

**3.11 伝承ロード**  
DEATH ROAD

**9月11日 水** 2024年  
13:30~15:30 (開場13:00)  
参加無料 定員100名  
(気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館 体験交流ホール(宮城県気仙沼市浜路上瀬9-1))

当機構では、三陸沿岸道路や震災伝承施設を活用し、新たな交流人口を呼び込む取り組みを進めています。このフォーラムでは、これまで実施したモニターツアーや検討会での意見をもちに、三陸沿岸地域の魅力を皆さんと一緒に考えます。ぜひご参加ください。

**基調講演**  
未来に役立つ災害伝承のための三陸沿岸道路の役割  
講師 奥村 誠 氏 東北大学災害科学国際研究所 教授  
京都市出身。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。向大学助手、講師、広島大学助教授を経て、2006年より東北大学教授。地域計画・土木計画を専門とし、フラジール、シベリア、ポリビアでのプロジェクトにも関わる。博士(工学)。

**女性が語る三陸の新しい魅力** パネルディスカッション  
~震災伝承施設と三陸沿岸道路の魅力と役割について~

コ-ファシリテーター 庄野 真岐 氏 石巻専修大学 教授  
司会 福岡 麻子 氏 気仙沼市 企画課 課長  
パネリスト 阿部 憲子 氏 三陸中央大学 准教授  
豊島 恵美子 氏 近畿日本ツーリスト(株) 仙台支店 仙台支店長  
橋元 真由 氏 (株) 日本銀行東北 仙台支店 仙台支店長  
原田 吉信 氏 (一社) 3.11伝承ロード 推進機構 推進機構長

申し込み・お問合せ(一財)3.11伝承ロード推進機構 お申し込みページはこちら  
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-2-26 コナクスビル3F  
TEL: 022-333-4281 月~金 9:00~17:30 (祝日を除く)  
3.11伝承ロード推進機構のウェブサイトからどうぞ  
https://www.311densoho.or.jp/ 3.11伝承ロード推進機構

主催: 一般財団法人3.11伝承ロード推進機構  
後援: 気仙沼市、南三陸町、石巻市、東松島町、震災伝承ネットワーク協議会、国土交通省東北地方整備局、宮城県、岩手県  
(一財) 国土計画協会が主催する「東洋道利用・観光・地域連携促進プラン」の実施会を活用しています

写真5 フォーラムリーフレット

**三陸縦断旅**  
震災伝承施設を巡る

写真6 制作動画サムネイル

支援団体より報告

## 日本の農山村・くらしの原点を学ぶ旅 「信州4大日本遺産めぐり」

一般社団法人ちの観光まちづくり推進機構

平成30年4月に誕生した一般社団法人ちの観光まちづくり推進機構（以下「ちのDMO」という。）は、設立当初3年の第1期「立上げ期」に引き続く5年間を第2期「連携基盤整備期」とし、令和3年度に制定した「中期5か年計画」に従い活動を展開しています。同計画では、DMOの基本理念を「訪れるひと、迎え入れるひとの人生を豊かにする地域力総合産業の構築」とし、特に、①地域資源を活かしたストーリー豊かな着地型旅行商品の造成・磨き上げ、②観光業のみならず地域住民、各種産業が一体となった地域全体での心のこもったおもてなし（カスタマーエクスペリエンスの向上）、③市町村域を越えた連携による魅力の向上、リピーター、長期滞在の確保、の3点に力を入れて取り組むこととしました。この様な中で、見過ごすことが出来ない観光素材「日本遺産」をどのように活用するかは、大きな一つのテーマとなりました。

### 1. 日本遺産はなぜ十分に活用されていないのか

「日本遺産 (Japan Heritage)」とは、地域の歴史的的魅力や特色を通じて日本の文化や伝統を語るストーリーを文化庁が認定する制度とされており、その目的は、ストーリーを語る上で欠かせない有形・無形の文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外へ戦略的に発信することで、地域の活性化を図ることとしています。ちのDMOの展開地域である茅野市も「星降る中部高地の縄文世界—数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に会う旅—」として、近隣の長野県内3市3町2村、山梨県内6市とともに広大な地域を日本遺産として認定されていますが、いずれの市町村においても「旅（旅行商品）」の目的として十分に活用されている状況ではありませんでした。その原因としては、①認定地域が広い（両県に跨っている）ために主導する団体が不明確で連携が図られていない、②どの自治体も行政サイドが日本遺産を所管するが、具体的な戦略を展開すべき民間団体との連携が図られていない、③民間団体も日本遺産をどのようにストーリー展開したら良いかわからない、といった点が挙げられます。令和3年度はコロナが益々猛威を振るい始めた中ではありましたが、「果たして他の地域も同じ状況なのか」、ちのDMOでは、その他の県内日本遺産認定地域3カ所を訪れて調査しました。その結果、1自治体の中の文化遺産が認定されている（認定地域が狭い）地域では、専門の部署（日本遺産推進室や同協議会）を置いて取り組んではいるものの、①物見遊山的な観光商品の域を出ずストーリーがなかなか伝えられていない、②日本遺産以外の観光資源との連携などの広がりがない、などの課題がわかる一方で、①ストーリーを伝える取組み（ガイドの充実、出版物など）を開始している、②欧米からの訪日外国人観光客を中心に地域の文化やくらしへの関心が高まっている、などの期待の声もお聞きすることが出来ました。

#### 【長野県内の4つの日本遺産】

- ①星降る中央高地の縄文世界【原始】（茅野市を含む長野県内3市3町2村、山梨県内6市）  
→数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に会う旅
- ②レイラインがつなぐ「太陽と大地の聖地」【古代・中世】（上田市）  
→龍と生きるまち 信州上田・塩田平  
\*レイライン：夏至と冬至に太陽の光が通り抜けるよう、神社や寺が1本の直線状に配置されていること。
- ③月の都 千曲【中世・近世】（千曲市）  
→姨捨の棚田がつくる摩訶不思議な月景色「田毎の月」
- ④木曾路はすべて山の中【近世・近代】（長野県内1市3町3村、岐阜県内1市）  
→山を守り 山に生きる

### 2. 4つの日本遺産を眺めてみるとー「高速道路利用・観光・地域連携推進プラン」への応募

コロナ禍ではありましたが、各認定地域を訪れお話を伺ったことは本当に良かったと思います。前出の

中期5か年計画にも「市町村域を越えた連携による魅力の向上」とありますように、上記4つの日本遺産を時系列に並べると、原始、古代、中世、近世、近代と我が国の農村文化が現代へと発展してきた軌跡とその精神性が市町村域を越えて生き生きと蘇ってきました。過去に「高速道路利用・観光・地域連携推進プラン」を活用された団体の方にこのことをお話ししたところ、これら4つの認定地域を周遊するためには高速道路を活用することが最適であり、是非とも同プランへ応募すべきとの励ましをいただき、申請することとしました（図1）。

審査員の皆様からは有益なご指摘を多々いただきましたが、特に「これを成功に導くためには、沢山の関係者を取りまとめていくリーダーシップが重要」「参加する各団体がそれぞれに収益を上げられる工夫が必要」とのご指摘は、後に組成する協議会組織の礎となりました。



図1

### 3. 我が国における旅行形態の変化

我が国の旅行形態は、過去30年間で団体旅行から個人旅行へ、発地型企画旅行から着地型観光へと大きく変化していますが、インバウンド観光客のここ10年間における団体→個人への変化がこれに拍車をかけています。地方の現場でも、観光客の旅の動機は、感動・満足から興味・共感に、旅の目的は、画一的な物見遊山から個人の価値観やテーマ中心に、観光地との関係は、一定の地や構造物などを対象としたものから住民の生活エリアでのふれあいや交流に変化していることが明らかになってきています。そのためにも、4つの認定地域を周遊するプランづくりでは以下の点に配慮することとしました。

- ① 来訪者に日本遺産の価値を、体験と学びを通して“点”でなく“自分につながるストーリー”として認識・体感していただく。そのためにも、各地域のガイドの意識の統一と質の向上を図る。
- ② 日本遺産以外の地域の観光資産にも誘導し、地域経済の発展に寄与する。そのためにも、カセット式の「学び・体験型商品」を造成・充実し、来訪者の興味と関心に応じて組み立てる。
- ③ 地域住民や事業者の理解と認知度を深め、受入と発信、おもてなしへの参加と協力を得る。
- ④ しっかりとした収益を得て、事業の持続性を確保する。

#### 4. これまでの取組みと成果

##### (1) コロナ禍での組織づくり・ストーリーづくり（令和4年度）

コロナが猛威を振るう中では、収束後に推進団体を立上げることが目標に、オンラインを活用した各認定地域との意見交換と事務局としてのちのDMOスタッフの知識の向上に努めました。特に、これから組み立てるストーリーの監修に、歴史学者であり信州大学名誉教授の笹本正治長野県立歴史館特別館長にご就任いただき、ご指導いただいたことは当事業に学術的な視点と深みを加えることとなりました。先生からは、日本遺産の至る所において、巨木や巨石にも「神」を見出して信仰している点や地域ごとの食文化や暮らしぶりの中に、日本遺産となる精神性を見出すことができることから、日本遺産に直接関係ない現代の暮らしや食などとの関連性も商品づくりに重要な要素となることを学びました。

##### (2) 「信州4大日本遺産周遊促進協議会」の立上げ（令和5年度）

コロナの第5類感染症への移行後直ちに「信州4大日本遺産周遊促進協議会」を立ち上げました。構成団体は、これまで意見交換を重ねてきた日本遺産4地域の観光団体、博物館、行政機関（観光担当課や日本遺産推進室、広域連合事務局など）などの18団体に加入いただけることになりました。ちのDMOが事務局を務め、事務局が構成員の意見を集約し事業提案して、実行委員会で検討後、事務局が事業実施・予算執行するという、事務局リード型のスピード感ある運営方式としました。立上げ後は、笹本先生による協議会全体での研修会、周遊ルート共通ストーリーの策定会議、顧客やターゲットの調査、ガイド力向上研修会、次年度に行うモニター旅行の計画、広報のためのポスターやホームページの検討、動画素材の制作の打合せを実施しました。

11月に（一財）国土計画協会の太田専務理事にご来訪いただきご指導を賜った際には、「素晴らしい事業ですから、じっくりと取り組んで良い商品に育ててください」とのお励ましのお言葉をいただきました。

##### (3) 本格的展開（令和6年度）

###### ① モニターツアーの実施（5月）

モニター参加者を集うとともに画像素材用のモデル2名を帯同し、協議会で作成した4泊5日のモニターツアーを実施しました（表1）。移動は全てチャーター車、各地ではガイドがリレーして学びや体験をサポート、日本遺産以外の観光素材との融合にも配慮しました。特に、食には伝統文化が伝わるものに着目し、縄文の地では屋外での縄文料理体験を組み込みました。

表1 信州4大日本遺産モニターツアー行程表

日程：2024年5月20日（月）～2024年5月24日（金）

※移動記号 = 車移動 … 徒歩移動

|                |            |   |                |
|----------------|------------|---|----------------|
| 5/20(月)<br>1日目 | 長野県<br>茅野市 | JR 茅野駅到着 … ヤマウラスティ「清水」チェックイン … 笹原まち歩き(縄文文化・地域歴史ガイド付き)<br>… 清水で昼食(森の家デリバリー弁当) = 井戸尻遺跡(旅する料理人「三上奈緒」氏の縄文食体験+夕食+小松館長解説)<br>… 清水帰着(宿泊) 一日目終了 | 朝×<br>昼○<br>夕○ |
| 5/21(火)<br>2日目 | 長野県<br>長和町 | 清水(朝食なし) = 黒耀石体験ミュージアム見学(大竹学芸員解説付き)・縄文ワークショップ(勾玉づくり) …<br>昼食(花食堂お弁当) … 星くそ館見学(大竹学芸員解説付き) … 相鉄プレッサインホテルチェックイン …<br>夜は自由行動・自由夕食 二日目終了     | 朝×<br>昼○<br>夕× |
| 5/22(水)<br>3日目 | 長野県<br>上田市 | ホテル(朝食) = 塩田平レイライン・生島足島神社(ガイド付き) = 中禅寺・安楽寺(見学) = 昼食(あいそめの湯)<br>= 上山田温泉旅館チェックイン(宿泊先:園山荘) = 「田毎の月」見学(ガイド付き) = 上山田温泉帰着 三日目終了               | 朝○<br>昼○<br>夕○ |
| 5/23(木)<br>4日目 | 長野県<br>千曲市 | 旅館(朝食) = 長野県立歴史館(学芸員ガイド付き) = 昼食(菅にてそば御膳) = 妻籠宿到着(撮影) …<br>妻籠宿散策(ガイド付き) … 街道浪漫おん宿葛屋チェックイン(夕食) 四日目終了                                      | 朝○<br>昼○<br>夕○ |
| 5/24(金)<br>5日目 | 長野県<br>木曾郡 | 旅館(朝食) = 木曾おもちゃ美術館見学(ガイド付き) = 昼食(木曾おもちゃ美術館) = 木曾くらしの工芸館見学<br>= 木曾平沢・丸嘉小坂漆器店見学 = 茅野市帰着 五日目終了   | 朝○<br>昼○<br>夕× |

モニター参加者のアンケートでは、各地域での体験内容、ガイドの対応、食事のいずれの評価においても「とても満足」「満足」となり、「5日間の全体のストーリーにつながりを感じたか」の問いに対しては全ての参加者が「とても満足」という回答でした。その一方で、ターゲット毎による移動手段の検討や宿泊施設の選択、日程とルートの融通性（顧客に応じた様々なバリエーション）については今後の検討課題（旅行事業者等の視点が必要）であることが明らかになりました。

②ポスター・チラシ・ホームページ等広報素材の制作（6～9月）

通常の手順とは逆かもしれませんが、今後の広報用素材については、上記モニターツアーの反応や参加者との反省会を経て制作することとしました。制作コンセプトは「現代人の学びの欲求への呼びかけ」「そこでは一体何が体験できるのか」「日常生活では得難い風景・時空・学び・食」としました（図2）。



図2

③プロモーションビデオの制作（9月）

上記②と同様に、利用者目線で興味と憧れを生み出すものを心掛けました。

④ツーリズムEXPOジャパンへの出展（9月26～29日）

協議会構成団体の皆さんのご参加を得て出展しました。おかげさまで、文化庁の日本遺産担当の皆様を始め、旅行・広告各社とのお打合せを開始するキッカケを作ることが出来ました（写真1、図3）。



写真1



図3

⑤商品化へ向けた旅行各社との検討（10～12月）

上記④でキッカケを作ることができた旅行各社との接触を開始。令和7年度上半期にはファムトリップを実施し、具体的な旅程の確認・評価、収益性の検討を開始することとしました。

⑥「信州4大日本遺産周遊促進フォーラム」の開催（2月21日）

「信州への誘客・交流、そして地域活性化につなげるために」をメインテーマに、協議会構成員と各地域のツアーガイドを対象とした研修会・フォーラムを開催しました（図4）。ガイド研修会では、「日本遺産の魅力をいかに伝えるか」との課題のもと、各地域のリーダーから先進的な取組みを学び合いました。フォーラムでは基調講演として、文化庁の三木参事官補佐から「日本遺産の現状と観光資源としての展開」、当協議会顧問に就任いただいた笹本先生から「信州日本遺産の魅力」と題したお話をいただいた後に、メインテーマを基にパネルディスカッションを行いました。各地域からの報告では、ボラン

**信州4大日本遺産周遊促進フォーラム**  
～ 信州への誘客・交流、そして地域活性化につなげるために ～

**1 目的** 日本の農村文化のルーツと発展の経過を学び体験できる信州の4つの日本遺産が連携して、周遊の仕組みと受け入れの体制を構築することにより、信州への誘客と交流の拡大を図るとともに、各地域のファンづくりと活性化につなげる。

**2 日時** 令和7年2月21日(金) 10:00～16:00

**3 会場** キッセイ文化ホール（長野県松本文化会館）3階「国際会議室」

**4 日程**

(1) 第1部 ガイド研修会「日本遺産の魅力をいかに伝えるか」

- 挨拶、これまでの取組み説明（協議会会長）
- 各地域のガイド実績報告・質疑（5団体）
- 挨拶・講評（文化庁、5のDMO）

(2) 第2部 フォーラム「信州への誘客・交流、そして地域活性化につなげるために」

- 来賓挨拶（一財）国土計画協会専務理事 大田英也 様
- 基調講演1 「日本遺産の現状と観光資源としての展開」(仮)  
文化庁(文化拠点担当) 参事官補佐 三木直樹 様
- 基調講演2 「私が考える信州日本遺産の魅力」(仮)  
長野県立歴史館特別館長 笹本正治 様
- 各地域の活動報告（5団体）
- パネルディスカッション  
テーマ「信州への誘客・交流、そして地域活性化につなげるために」  
【パネリスト】

  - 井戸匠考古館館長 小松隆史 様
  - 黒曜石体験ミュージアム学芸員 大竹幸恵 様
  - 塩田平ボランティアガイドの会会長 大口義明 様
  - 千曲市教育委員会歴史文化財センター学芸員 平林大樹 様
  - 本商路ツアーガイド会代表 柳川浩司 様

- 【モデレーター】

  - 文化庁(文化拠点担当) 参事官補佐 三木直樹 様
  - 長野県立歴史館特別館長 笹本正治 様

- ・ 信州4大日本遺産周遊促進協議会会長 熊谷 晃

図4

ティアガイド全員で英語、仏語、独語の会話教室を開始した事例や、日本遺産そのものだけでなくそれを支える地域の仕組み（棚田を支える水路や灌漑のための古くからのため池文化など）まで言及するガイド手法、日本遺産をテーマにした短編小説の作成や検定制度の導入などが披露されました。

またパネルディスカッションでは、旅行商品を提供する私達は同時に地域の生活者であるのだから、画一的な商品が無意識に提供するのではなく、今この季節（とき）にだけしか出会うことの出来ない風景やとっておきの素敵な場所や体験、くらしや学びを提供し、丁寧に伝えていくことの重要性、各地域が統一した屋外のエリア案内板や道路標識を整備していくことの必要性などの指摘、子ども達を中心に据えた日本遺産に着目した国際シンポジウムの開催などの提案がされました（写真2、3）。

終了後の懇親会では、今後の夢などを語り合い夜遅くまで皆さんと結束を固めました。



写真2



写真3

#### (4) 反省と成果

コロナの影響で事業の開始が1年ほど出遅れる形となったために、自走できる商品化にまでは至っておらず、高速道路の利用もモニターツアーやそのためのロケハン、広報への協力依頼に止まってしまいました。しかしながらその反面、組織間同士のしっかりと意思疎通やストーリーに対する共通認識を深めることが出来たため、協議会構成員のみならずツアーガイドとして参加する地域住民の皆さんの誇りとやる気と探求心を高めることが出来ましたし、今後の展望も拓け、助成事業のための事業に止まることはありませんでした。このことは、フォーラムの締め挨拶での尖石縄文考古館 小池岳史館長の次の言葉に象徴されています。「私達考古学に携わる者は日々「遺跡は自ら声を発しない」との認識のもと活動しているが、本日こそここに携わる私達の取組みが重要であることを認識した。遺跡は保存することはもとより、多くの皆さんと連携して観光に結びつけ学びと体験の地として沢山の皆さんに訪れていただけるようにしなければならない。遺跡を活かすということは、遺跡を活用して地域の活性化を図ることであると改めて確認できたことに感謝する。」

#### 5. 今後の取組み

国土計画協会にご支援をいただきました3年間の反省と成果を踏まえて、今後は以下の2つの柱のもと、自走できる日本初の日本遺産周遊型の本格的な旅行商品化と広域連携によるコミュニティビジネスの創出に取組み、地域活性化への展開を図って参ります。

##### (1) 国内外からの誘客の仕組みづくり

インバウンド・富裕層向けの周遊型プレミアムツアーや教育旅行向け学習・体験ツアー、自家用車利用型オーダーメイドツアーなどを旅行社の専門的視点を取り入れながら造成します。

→①商品造成ファトリップの実施、②エリア周遊マップ・エリアガイドブックの作成、③企画型旅行商品の販売・実施など

##### (2) 受入の体制づくり

引き続きガイドを始めとする人材育成、交通事業者など関連事業者との連携、旅行商品を企画する各地域の担当者の資質向上を図ります。

→①ガイド研修会の実施、②各地域交通事業者との送客の仕組み構築、③旅行商品造成道場の開催など

最後に、3年間にわたり温かいサポートとお励ましをいただきました太田専務理事を始め、(一財)国土計画協会の皆様に深く感謝申し上げます。

支援団体より報告

## 新たな歴史を学ぶ旅！！ 「佐世保鎮守府」を活用したフィールドミュージアム事業

特定非営利活動法人黒島観光協会

### ●「黒島の集落」世界遺産への道

「黒島の集落」を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は平成30年（2018）7月4日に世界文化遺産に登録されました。平成19年（2007）の取組み開始から12年目の出来事でした。

世界遺産の構成資産となるためには、国の法律で保護されている必要があります。黒島天主堂は平成10年（1998）に重要文化財に指定されていましたが、島全体は文化財になっていませんでした。そのため黒島全体の調査を平成19年から3年間行ったところ、黒島の自然環境に根差した人々の生活の特徴が次々を明らかとなり、平成23年（2011）9月に島全体が国の重要な文化的景観「佐世保市黒島の文化的景観」に選定されました。

世界遺産の構成資産となる準備は順調でしたが、登録については順調とは言えませんでした。平成24年（2012）から2年続けて国内の他の候補と競合し世界遺産への推薦を逃し、平成27年（2015）によりやく推薦されたものの、専門機関による現地調査の結果、潜伏キリシタンに焦点を当てるよう見直しを迫られました。このため推薦をいったん取り下げ、推薦書の内容を見直すことになりました。これによりさらに2年ほど待つことになりましたが、これは悪いことばかりではありませんでした。黒島ではこの間の平成27年にNPO法人黒島観光協会が発足し、ガイドの育成を進めるとともに、平成28年（2016）には黒島港フェリーターミナルに隣接して「黒島ウェルカムハウス」をオープンさせ、観光客の受け入れ態勢を整えることができました。

そして平成29年（2017）1月に再び推薦書を提出し、同年9月の専門機関の現地調査を経て平成30年（2018）7月の世界遺産委員会にて世界文化遺産への登録が決定しました。



### ●日本遺産「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち」と黒島

日本遺産とは、平成27年（2015）に文化庁が設立した認定制度で、地域にある多種多様な文化財を「なぜそこにあるのか」という背景に注目して一つのストーリーを構成する要素としてPRしていく取組みです。そして黒島には旧海軍佐世保鎮守府に關係する日本遺産「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち」の構成文化財が存在しています。

この日本遺産は、明治期の日本が海外列強からの侵略を防ぐために天然の良港4カ所に海軍基地となる鎮守府を置くという国家プロジェクトにより誕生した軍港都市、横須賀、呉、佐世保、舞鶴に残る近代化遺産や海軍ゆかりの文化などで構成されています。佐世保市にも明治22年（1889）に佐世保鎮守府が置かれ、軍港都市として急速に発展しました。鎮守府と黒島との関わりは明治44年（1911）のことになります。鎮守府開庁当時は佐世保湾内のみだった佐世保軍港の範囲が、この年に黒島西端の女瀬ノ鼻まで拡大されたのです。

そして大正3年（1914）に第一次世界大戦を契機として黒島にも海軍の砲台が建設されました。以来、昭和20年（1945）の終戦まで黒島は佐世保軍港の最も外側を守る拠点としての役割を果たしました。



黒島名切砲台跡

### ●「高速道路利用・観光・地域連携推進プラン」の取組みについて

「高速道路利用・観光・地域連携推進プラン」への申請は、新型コロナウイルス感染症の影響による環境の変化が大きな契機でした。

黒島の観光客数は、平成25年（2013）の1,101人から毎年増加し、平成30年（2018）の世界遺産登録年には6,470人の観光客が黒島を訪れました。しかしその翌年には3,648人と落込み、令和2年（2020）には新型コロナウイルス感染症の影響で989人と激減してしまい、島内の経済活動は沈滞していました。そのためコロナ収束後の黒島への集客を図る取組みが必要となりました。

※黒島観光客数の推移(単位：人)

| 年      | 平25年  | 平26年  | 平27年  | 平28年  | 平29年  | 平30年  | 令1年   | 令2年 | 令3年   | 令4年   | 令5年   |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|
| 黒島観光客数 | 1,101 | 2,168 | 3,799 | 4,260 | 4,354 | 6,470 | 3,648 | 989 | 3,042 | 3,517 | 4,139 |

事業の構成にあたり黒島への来訪目的を調査したところ、世界文化遺産である「黒島の集落」や「坂道のアポロン」等、アニメや映画のロケ地となった「黒島天主堂」、日帰りで離島を訪問する「島旅」などのニーズがありました。そのため、今後、新たな顧客層を掘り起こすためには、別の視点が必要でした。

令和2年に行った佐世保のイメージ調査では、「ハウステンボス」や「西海国立公園九十九島」と並び「港街・佐世保」のイメージも広く認識されており、「軍港・旧海軍」、「米軍基地」というイメージも大きいことがわかりました。

そこで、平成28年（2016）に日本遺産に認定された「鎮守府」の構成文化財が黒島にも存在することに着目しました。

さらに、佐世保観光コンベンション協会が行った「来訪者満足度調査」によると、北部九州からの来訪が約67%、そして来訪者の約70%がマイカーやレンタカーを利用していることが判明し、「高速道路で来訪している」という仮説を立てました。そして佐世保市と周辺市町全体を「フィールドミュージアム」と見立て、来訪者や地元住民が佐世保鎮守府の関連資産や地域の自然や文化、食といった「観光コンテンツ」を高速道路を順路として周遊する、『新たな歴史を学ぶ旅！！「佐世保鎮守府」を活用したフィールドミュージアム事業～日本近代化の躍動を体感できるまち～』を企画しました。



ここからは具体的な事業の内容について紹介します。実施にあたっては、

- (1) 佐世保市を中心に長崎県北部に点在する鎮守府に関わる地域資源を連携させた広域プランの実現に向け、佐世保観光コンベンション協会や平戸市、川棚町等と一体となった実施体制を構築すること
- (2) 鎮守府だけに絞らず他の観光資源との連携によるプランの広がりを目指すこと

以上の二点を意識した取り組みを行うため、佐世保市や佐世保観光コンベンション協会をはじめ、様々な観光関係団体や民間事業者との連携を模索すると共に、田平天主堂や西海国立公園九十九島、豊富な海の幸や、佐世保バーガーなどの観光コンテンツを活用し、周遊滞在型観光の確立を目指しました。

#### 【令和4年度の取り組み】

令和4年度は今後の観光誘客に繋げるため「認知度向上」、「新たなマーケットへのアプローチ」に寄与する事業として『佐世保鎮守府』を活用したオンラインツアー』を実施しました。

オンラインツアーでは、飛行機で長崎空港に到着後、高速道路を活用して佐世保鎮守府の構成資産を巡ることをイメージし、各地域のグルメを紹介しながら広域周遊を促すプロモーションを行いました。

その他の取り組みとしては、佐世保観光コンベンション協会や針尾無線塔保存会との連携により、136メートルの高さを誇る国重要文化財「針尾無線塔」のライトアップを初めて実施しました。

また、旧軍港四市（横須賀市・呉市・佐世保市・舞鶴市）が連携し、それぞれに存在する旧海軍グルメを活用したイベントの開催や、市観光課ではSNSを活用した佐世保鎮守府の情報発信を行いました。



針尾送信所ライトアップ

#### 【令和5年度の取り組み】

令和5年度は、令和4年度の取り組みを受け、実際に高速道路を活用して佐世保鎮守府エリアを訪問する広域周遊型観光を目指し、『佐世保鎮守府』を活用した広域周遊ラリー事業』を実施しました。佐世保鎮守府の構成文化財は長崎県北部の広範囲に点在していることから、高速道路を活用した観光客の周遊を促すため、周遊ラリーの冊子には佐世保鎮守府エリアの地図を掲載すると共に地域ならではのグルメ等を紹介し、参加者の特典として「佐世保鎮守府カード」と特製パスケースを制作しました。

また、事業者と連携した取り組みとしては、日本遺産フェスティバルにおけるブース出展などのPR活動や、佐世保観光コンベンション協会による佐世保鎮守府特別公開ツアーの催行、福岡市での写真展開催のほか、市文化財課と連携し針尾無線塔の発掘調査の特別公開を実施し、保存と活用の面から文化財の観光活用を行いました。

さらに、黒島観光協会では、クラウドファンディングを活用し、黒島にある佐世保鎮守府構成文化財や世界文化遺産「黒島の集落」の歴史資源と地元のグルメである「しま飯」、「ふくれ饅頭」等を活用した「歴史散策ガストロノミーツアー」を開催しました。



周遊ラリーパンフレット



黒島ガストロノミーツアー

#### 【令和6年度の取り組み】

最終年度となる令和6年度は、謎解きを楽しみながら佐世保鎮守府の関連遺産を周遊する体験型観光プログラムとして、人気のあるリアル宝探しゲーム「佐世保鎮守府調査団」を開催しました。

前述の「来訪者満足度調査」によると、佐世保地域における認知経路はインターネットや口コミが多い傾向でしたが、今回の取組みでは平戸市、西海市、川棚町の各教育委員会と連携し、小学校へチラシを配布すると共に道の駅等への冊子の設置を行ったことから、認知経路としてはチラシ・ポスターが多いという結果となり、2,309人の方に参加いただくことが出来ました。

滞在時間については、佐世保観光コンベンション協会による来訪者満足度調査において日帰り（半日）観光が31.9%となっていることに対し、リアル宝探しゲームでは4時間以上の搜索が全体の80%となるなど、課題の一つである滞在時間の向上に繋がったと考えています。

また、事業者と連携した取組みとして日本遺産「鎮守府」の構成文化財である「西九州倉庫」のライトアップや、西肥自動車と連携した鎮守府ギャラリーバスの運行、市文化財課との連携による針尾無線塔を会場とした写真展やコンサート等を実施しました。

さらに、佐世保鎮守府エリアだけではなく広域周遊を促すため、旧軍港4市を巡る「護守印」や日本遺産を巡る湾内クルーズと連携した「御船印」にも取組みました。

その他、西海みずき信用組合と長崎国際大学が連携して、日本遺産「鎮守府」の構成文化財である「戸尾市場」をフィールドとした「食べ歩き事業」なども開催しました。

委員の皆さまからご指摘を頂いていた、「黒島観光協会だけでなく行政並びに佐世保観光コンベンション協会をはじめとする関係事業者と連携した取組みを推進すること」や、「佐世保鎮守府の関連資産だけでなく、グルメ等の観光資源と連携したプロモーションを展開すること」については、様々な関係事業者からのご支援を頂きながら、3年間事業を展開し集客に繋げてきたところです。

最後になりますが、3年間の高速道路利用・観光・地域連携推進プラン事業終了後の目標として、今後、次の3点に取組んでいきたいと考えています。

1点目は、「佐世保鎮守府」の商品化・自走化の実現です。

本事業終了後、事業報告と振り返りを元に、佐世保観光コンベンション協会等と連携を図りながら、「佐世保鎮守府ツアー」（仮称）として商品化を進め、継続的な販売を目指していきたいと考えています。

2点目は、ハウステンボス・西海国立公園九十九島に続く、新たな観光資源「佐世保鎮守府」の実現です。

令和8年度に日本遺産「鎮守府」のガイダンス施設となる「させぼ立神近代化歴史公園」（仮称）が供用開始することから、本施設を核として、佐世保鎮守府の構成文化財並びに観光資源を連携させることで、周遊滞在型観光の実現を目指していくものです。

3点目は、持続可能な黒島の未来です。

様々な視点から黒島の魅力を発信し、ファンをひとりでも多く作ることで、黒島の活性化を目指していきたいと考えています。

最後に、3年間の事業実施にあたっては、各自治体や関係団体にご協力いただき厚くお礼申し上げます。また、国土計画協会様にはご支援とご指導賜り事業を終了することが出来ましたことに衷心より厚くお礼を申し上げます。



宝探しゲーム参加冊子



させぼ立神近代化歴史公園 完成イメージ